

高齢者の社会参加を促すしくみの構築と実証 既存の地域資源と新たな資源(まち記者,市民ポータル)をつなぐ

中村亜紀^{†1} 八木龍平^{†1} 指田直毅^{†1} 石垣一司^{†1}

超高齢社会において高齢者が地域で自分らしく暮らすためには、人・地域と繋がり社会参加するきっかけづくりが必要である。我々は東京都日野市をフィールドに、社会参加を促すしくみづくりを住民とともに実施した。始めに高齢者や地域活動にかかわる関係者や組織に対する調査を行い、新たな資源として、地域情報の収集・発信を担う「まち記者」、情報を蓄積・発信する市民ポータルサイト「Hi Know!(ひのう)」を構築、これらを地域の既存資源とつなぎ、埋もれた地域情報を共有することで高齢者の社会参加を促し、新たな活動の誕生を支援する。現在、本活動は地域組織が継ぎ、継続・発展している。

A construction and practice of social system that supports senior citizen's community participation, by connecting new community resources, “machi-kisha” and portal site “Hi-Know!”, with existing resources.

AKI NAKAMURA^{†1} RYUHEI YAGI^{†1} NAOKI SASHIDA^{†1}
KAZUSHI ISHIGAKI^{†1}

For the elderly live true to themselves in their region, it is necessary to create opportunities to connect with people and regions and lead community participation. In Hino-City (Tokyo), we have constructed and practiced a social system which promotes community participation, in collaboration with citizens. We first conducted a survey for stakeholders concerning the elderly and community activities, then we created new resources, “machi-kisha(town reporter)” which collect and disseminate local information, “Hi-Know!(citizen portal site)” which store and disseminate the information, and connect them with existing community resources. The achieved social system enables the promotion of elderly participation and supports the birth of new activities, by sharing local information buried. Currently, this activity is taken over by the regional organizations, and is continuing and growing.

1. はじめに

年々高齢化が進む中、「超高齢社会」に暮らす高齢者の地域社会との関わりにおいて、様々な文献により閉じこもりによるリスクが示されている。

例えば、閉じこもりになることで、要介護状態へ進行するリスクが高くなり(渡辺)[1]、交流など社会的刺激が遮断されるため、認知症発症との関連(蘭牟田)[2]や死亡率が高く生活自立度が低下する(新開)[3]と示されている。

一方、高齢者が能動的に社会参加することは健康の保持・増進に重要であり(杉澤)[4]、男性は、近距離ネットワークが生活満足度を高め、女性は集団参加数が多い者ほどディストレス^aが低く、生活満足度が高い(原田)[5]と示されている。

高齢者にとって心・身体・地域関係において自分らしく暮らすためには、人・地域との関わりが重要であり、その関係を形成しやすい環境づくりが必要である。

また、高齢者個々の社会参加のきっかけや関わり方、必要とする情報など、高齢者のニーズは多様であり、行政の

施策だけでなく住民主体の地域活動も取り入れた手厚い支援が必要と考える。

平成16年度の内閣府調査[6]によると市民活動が活性化することで地域課題解決が進み、地域のつながり形成に効果がある。このことから住民主体の地域活動を活かした高齢者の社会参加を促すモデル作りを提案し、日野市および日野市社会福祉協議会の協力のもと住民とともに活動を進めてきた。

本稿では、地域の既存資源に新たな資源をつなぎ、高齢者の社会参加を促すモデルの提案から住民参加による活動の概要と実践について報告する。

2. 高齢者に関わる地域調査

東京都日野市は、都市郊外のベットタウンとして人口が増え、市内の一部団地では既に高齢化率が50%近い場所もある。このような状況になる事を見据え「高齢者見守り支援ネットワーク」^bという地域で高齢者を支える取り組みが行われている。

^{†1} 株式会社富士通研究所
Fujitsu Laboratories Ltd.
^a Distress とは、精神的苦悩

^b 日野市「見守り支援ネットワーク」
<http://www.city.hino.lg.jp/index.cfm/193,73489,323,1915.html>

我々は、日野市における高齢者をとりまく環境を把握するため、組織、活動団体に対してヒアリング調査を行い、一部地域活動については参加して体験・観察調査も実施した(表1)。

体験・観察調査では、スタッフとして同じ活動を行い、そこに集う住民と直接会話を交わす機会を得た。

1 調査対象リスト

Table 1. List of investigation object

ヒアリング対象(件数)	体験対象(件数)
市役所 (4名)	ふれあいサロン (1件)
日野市社会福祉協議会(1件)	地域団体 (1件)
地域包括支援センター(1件)	
デイサービスセンター(1件)	
ふれあいサロン (2件)	
老人クラブ (2件)	
地域団体 (1件)	
NPO 法人 (1件)	

また、参考までに筆者らは、高齢化率40%を超える日野市多摩摩の森自治会(JR 豊田駅近く)の住民を対象とした意識調査も実施しており、社会参加率の高い地域でも男性の地域との関わりが上手く移行できない実態を把握している。[7]

(1) 調査結果

<現状>

日野市では、自治体が発導して地域組織が中心となり、高齢者を地域で支える取組を長年行っている事から、住民の意識も高い。意欲的な住民リーダーが率いる活動団体は、地域の課題は自分達で何とかしようと様々な活動を行っている。

<気づき>

一方、住民主体の活動団体は、活動エリア内外において十分にアピールしきれておらず、特にエリア外の高齢者が活動を知る機会がほとんどないと感じた。日野市は、浅川によって地域が分断されており、浅川の北側と南側では文化が違うという程、独自に発展していることから、昔は情報の流通があまりなかったこともあり、現在も一部影響があると考えられる。また、ヒアリングでは、(浅川より南の)東側と西側でも各地域で活発に行っている活動を知らないケースがあり、起伏の激しい地理的環境が影響しているかもしれないと思われる。

また、活動分野(NPO 法人、文化、スポーツなど)によって、管轄する組織が違うことから、それぞれが情報を管理・発信しており、住民は欲しい情報がどこにあるか把握しきれていないように思われる。

<着目ポイント>

ヒアリング調査において、地域で活動している住民から社会参加について必要な次の4つのポイント(表2)を得る事ができた。

表2 社会参加のポイント

Table 2. Point of social participation

社会参加に必要なポイント	
交わる：異なる世代、活動、業種の交流と連携	
	新たなチャレンジへの誘発
	他者から情報を取得
	非日常の実現
	共存関係
活かす：スキル、経験の発掘、活かし方を見極める	
	やりたい事、やれる事の発掘
	活かすための教育、見極め
	活かす場作り
備える：非常時や身体の衰えに備える	
	活動の中で見守り
	日常生活の維持、持続
	非常時に必要な情報把握
タイミング：正しい情報を適切な時期に得る	
	知って理解して、担い手になる
	予防、維持意識向上
	違う視点で情報取得

(2) 考察と取組方針

我々は、消費者行動の仮説(認知、感情、行動)^cを用いて、高齢者が社会参加するプロセスを次のように想定し、各過程において高齢者の特徴(心身的な衰えによる支援)や情報リテラシーに配慮した次の環境が必要と考えた。

「情報を知る」

情報を集約して多様な方法(紙、Web サイト、第三者の支援)により情報提供ができる環境

「情報に興味をもつ」

埋もれた地域情報、これまで知る機会の無かった情報提供ができる環境

「情報を選択する」

第三者による高齢者の選択支援と後押しをする環境

日野市の現状と気づき、社会参加に必要な着目ポイントおよび想定する社会参加へのプロセスから、社会参加を促すモデルのコンセプトを以下に示す(図1)。

^c 消費者行動モデル(AIDA)の3つのプロセス(認知段階、感情段階、行動段階)を用いた

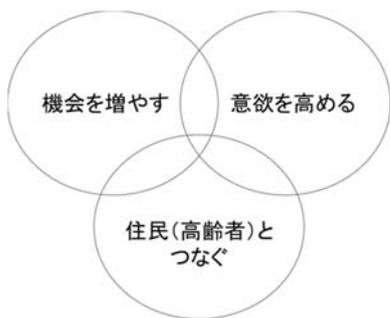


図 1 モデルのコンセプト
 Figure 1 Concept of Solution model

我々が想定する高齢者の社会参加シナリオは、以下の通りである。

- ・ 情報を知る機会が増える
- ・ やりたい事を見つける (見つけやすい)
- ・ 活動に参加し、人と繋がる機会が増える
- ・ 人脈が増える
- ・ 他の活動へ誘われる
- ・ 新しい活動を知り、活動が広がる
- ・ やりたい事を見つけ、スキルを身に付けようとする

3. 高齢者の社会参加を促すしくみ

3.1 全体像

図 2 は、地域の既存資源“住民”、“地域組織”、“活動団体”に新たな資源として、住民が担う“まち記者”(後述)や活動団体の情報発信の“場(ポータルサイトと冊子)”を組み合わせ、地域情報の流れを整理したものである。

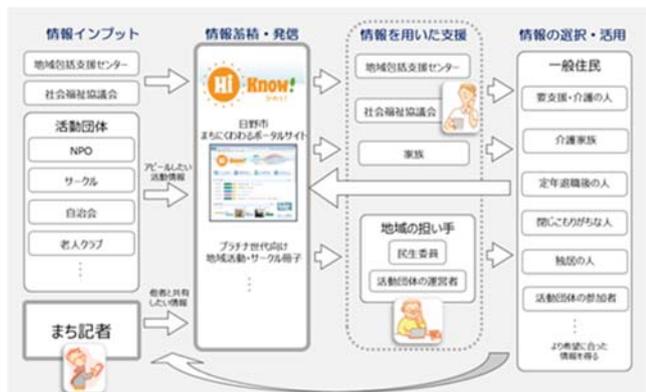


図 2 地域情報の流れ
 Figure 2. Flow of regional information

表 3 地域の役割

Table 3. Role in regional

役割	担う人, 組織
情報の収集・登録・発信	まち記者, ポータルサイトに登録した地域組織, 活動団体
情報の蓄積・発信	ポータルサイト, 冊子 「Hi Know! (ひのう)」
情報を用いた支援	社会福祉協議会, 地域包括支援センター, 民生委員など
情報の選択・活用	住民 (地域組織が選択支援)

しくみの関係者(住民, まち記者, 地域活動団体, 地域組織など)に対して、情報の収集, 活用などの役割(表 3)や情報の流れを明示する事により、各関係者はそれぞれの役割を認知し、活動の中で価値を見出そうとして情報が流れるようになると考えた。

例えば、まち記者は、情報収集・登録・発信という役割を担うことで、個人視点から住民視点に意識が変わり、住民と共有したい情報を気かけ、探す行動の中に価値を見出そうとする。また、住民は、まち記者の役割を認知することで、住民自らまち記者に情報を提供し、価値を見出そうとする。このような関係性において、まち記者に情報が集まるようになり、ポータルサイトの掲載情報量や鮮度が維持できると思われる。

地域情報の流れを明示したことも新たな活動の幅を広げる可能性に繋がる。情報提供者であるまち記者や活動団体は、情報が住民にどのように伝わるのかを理解することで、情報伝達・選択支援を担う地域組織から住民のニーズを得る事ができ、新たな活動が誕生するきっかけになると考えた。

3.2 地域の新資源

(1) まち記者

まち記者養成講座を受講した日野市の住民である。

富士通研究所が開発したまち記者養成講座[8]は、地域の魅力を発信するために必要なスキルを養成するものであり、次の内容を学ぶ。

- ・ まち記者の特徴
- ・ 自身の思考タイプ(六眼モデルを活用d)を知り、インタビューを行う方法
- ・ 傾聴方法
- ・ 記事の書き方
- ・ 写真の撮り方
- ・ 記事を掲載する際の注意事項
- ・ ポータルサイトへの掲載方法

d 6眼とは、デジタル、アナログ、主体、客体、未来、過去の視点で自己のタイプを知る。(「本当の自分がわかる 6眼心理テスト」林 吉郎、八木龍平著)

などを学び、取材体験も行う。

まち記者の特徴は、取材相手の良いところを見つけ、記事にする事であり、良いところの捉え方や取材先の分野は、まち記者らしさが現れる。まち記者としてひとり立ちできるようにになると、活動に用いる名刺(図3)を配布する。



図 3 まち記者の名刺

Figure 3. Business card of "machi-kisha"

名刺の裏面は、まち記者のアイデアでデザインした。このようなアイデアは、月に1度、まち記者が集まる連絡会で検討する。その他、各自の近況、取材先情報や活動上の困りごとなども共有する。

取材先情報の共有は、通常メーリングリストやポータルサイトのまち記者ページを用いて行う。

(2) 市民ポータルサイト

市民ポータルサイトの呼称「Hi Know!(ひのう)」(図4)は、まち記者をはじめとする関係者によって命名した。住民に日野市を知り、精通して頂くとともに地域と繋がり、仲間づくりをして頂きたいという願いが込められている。

本活動の目的は、高齢者の社会参加を促すことから、掲載情報は、高齢者が気軽に徒歩・コミュニティバスなどを利用して参加できることが前提であり、日野市内のローカル情報に限定した。

平成25年度の内閣府調査[9]によると、高齢者は健康・スポーツ、趣味、地域行事を通じて地域参加している割合が高い。このことから、ふれあいサロンやサークル団体などから登録依頼の声掛けを行った。2014年8月8日公開時には、約100団体が登録、現在も団体数は増え続けている。

ポータルサイト「Hi Know!(ひのう)」[10]は、主に次のコンテンツから成る。

- 市内のイベント情報
(市内活動団体が参加する市外イベントも記載可能)
- 市内の活動団体
- お知らせ

イベント・活動報告

まち記者取材記

お役立ち情報

(事務局と地域包括支援センターのみアクセス可能)

まち記者 各自のページ 他



図 4 ポータルサイト「Hi Know!」

Figure 4. Portal site "Hi-Know!"

市内の活動団体には ID を配布し、各自で更新できる。市内イベント情報、イベント・活動報告、まち記者取材記は、活動団体ページを中心に相互リンクできる。

まち記者は、各自ページを所有しており、自身のページを経由して登録・掲載および自身が掲載した記事を一覧できる。その他、まち記者間の取材予定も共有できる。

(3) 冊子

掲載内容をプラチナ世代向けに限定し、2,940冊作成した。自宅で気軽に見る事ができ、携帯しやすいA5横サイズ93ページで構成される(図5)。



図 5 冊子「Hi Know!」

Figure 5. Booklet "Hi-Know!" for senior citizen

冊子には、プラチナ世代向け70団体を掲載しており、その他、日野市社会福祉協議会が支援する「ミニミニふれあいのつどい」を9団体、日野市老人クラブ連合会を49

クラブ、地域包括支援センターを9組織掲載した。表紙は市内のあらゆる場所・施設、日野市の四季折々の写真を掲載し、中身だけでなく表紙も話題提供できるものにした。

中身については、ポータルサイト「Hi Know!(ひのう)」と共通であり、各ページに掲載している“まち記者 View”は、まち記者が団体に参加(見学・体験)した感想を書いている。住民と同じ目線で書かれた内容は、共感しやすく、社会参加への後押しになると考えた。

冊子設置場所については、普段立ち寄る機会の無い高齢者にも地域組織の場所や人を知ってもらい、気軽に再び立ち寄って頂くきっかけづくりになる事を目的に、日野市社会福祉協議会(日野本町、高幡)および市内に9ヶ所ある地域包括支援センターとした。その他、活動に協力頂いたひの市民活動団体連絡会が管理する市民活動支援センターや見守り事業所の信用金庫(日野市内の支店)には閲覧用を設置頂いた。

冊子の分配数と配布先(2015年3月末現在)

日野市社会福祉協議会(2ヶ所) 1100冊
配布先:住民,活動団体 他

地域包括支援センター(9ヶ所) 760冊
配布先:住民,老人会,介護事業所,民生委員,
担当地域の老人会 他

Hi Know!(ひのう)事務局 1080冊
配布先:登録団体,老人会,民生委員,活動関係者,
イベント「市民フェア2014」,「まち活」に
て配布,日野市中央図書館(永久保存)他

4. 住民参加による活動の実績

日野市(地域戦略室,高齢福祉課,地域協働課),日野市社会福祉協議会,日野市教育委員会(生涯学習課),住民(まち記者,ひの市民活動団体連絡会),実践女子大学(原田謙研究室),地元企業などと定期的に情報共有会を催し、活動を進めていった。

4.1 まち記者を養成する

(1) まち記者養成講座を実施

日野市社会福祉協議会と富士通研究所共催によるまち記者養成講座を開催した。日野市広報誌,日野市社会福祉協議会のボランティアインフォメーションに募集を掲載,直接的な住民への声掛けにより参加者を集めた。

まち記者養成講座は,2日間(2時間半/日)実施し,

後日,取材体験も行った(2回目以降は,初代まち記者の取材に同行した)。これまでに計4回開催(約1年間)しており,30名(関係者含む)の方が受講し,その内まち記者に登録したのは,約20名である。

本活動では,上記とは別に実践女子大学(原田謙研究室)の学生が,13名学生まち記者として参加した。まち記者講座を受講後,まち記者と共に地域活動団体に参加し,取材活動を行った。参加する団体によっては,実際に体験もでき,体験したリアルな感想を記事にする事ができた。

(2) まち記者の活動を紹介する動画を作成

まち記者の認知度を高め,仲間を増やす事を目的に,まち記者活動をわかりやすく紹介する動画を作成した。

百草団地ふれあいサロンの皆さんに協力頂き,実際に取材している様子を撮影するとともに月例会の様子,まち記者の生の声を盛り込んだものである。

ポータルサイト「Hi Know!(ひのう)」の“まち記者になりたい方”で閲覧できる。

4.2 ポータルサイトを構築(UI評価)

Webサイト構築は,地元企業も参加のもと行われた。UI評価では,日野市シルバー人材センターに協力頂き,条件に合う被験者の派遣および実験会場を提供頂いた。

参加被験者の情報:

- ・パソコンを日頃使用しており,文字入力ができる人
 - ・60代,70代の住民
 - ・男性3名,女性2名
 - ・日野市内のイベントは,日野市広報誌で見つける人
- UI実験方法:(所用時間:1時間30分/人)
- ・事前アンケートに回答
 - ・ポータルサイトを操作し,4つのタスクを実行する。
「イベントを探す」
「活動団体を探す」
「イベントを登録する」
「活動団体の登録と確認」
 - ・事後アンケート(5段階評価)

評価結果:

高齢被験者による指摘は,

- ・イベント・団体検索,一覧において6件
- ・活動団体ページ,一覧において2件
- ・イベント,団体登録において27件

登録画面における操作性や文言から改善をすすめた。

アンケートでも,登録など使用上の工夫が必要と感じている方が多かった。一方で,ポータルサイト自体は,便利で有用であり,イベントや活動団体を探したい,自分の参

加している活動団体を登録したいと思っている事がわかった。

また、実験中に配偶者の写真を見つけた被験者が、とても喜び、Web サイトが公開したら是非見たいと反応した。高齢者の場合、Web サイトに自身の知るモノが掲載される事は、見る動機に繋がる事がわかった。

4.3 掲載情報を収集・発信する

(1) 取材活動

ポータルサイトに登録頂く団体への声掛けを行うため、生涯学習課が発行する「サークル団体・施設ガイド」を頼りに連絡し、本活動について説明の上、登録掲載の協力を仰いだ。取材を了承してくれた団体については、改めて訪問日を調整し、まち記者が活動に参加(見学・体験)の上、団体専用の Web サイトページを作成した。

まち記者が、取材時に聞く基本内容は、以下の通りである。まち記者は、各団体メンバーの思いも受け止め、情報をまとめる。

活動経緯、活動内容、活動に対する思い

住民が参加する際に必要な基礎情報

(活動日時、会費など)

連携活動している団体の有無

団体から住民に向けた一言(アピールポイント)他

(2) ポータルサイト上で、イベントを企画(作品展)

ポータルサイト「Hi Know!(ひのう)」を多くの住民に閲覧してもらい、作成者にとって励みの場を提供するため、写真など住民の手作り作品を掲載するイベントを企画した。

作品を制作する登録団体(デジカメ、俳句、絵、ふれあいサロンなど)に声掛けを行い、展示可能な作品を72点(2015年10月現在)提供頂いた。作品は、随時、まち記者取材記に掲載した。

イベントを実施して、掲載している事をお伝えすると、それまで Web サイトを見る機会が無いと言っていた方が、見たいからアクセス方法を教えて欲しいと気持ちに変化が起こり、活動メンバーの励みになったと手紙を頂くケースもあった。

4.4 ブラチナ世代向け冊子を作成

高齢者の方に提供したい情報を掲載。団体は、ポータルサイトから高齢者向け団体を70団体抽出し、地域包括支援センターや日野市老人クラブ連合会などの情報も1冊にまとめた。冊子の表紙は、まち記者および関係者から提供頂いた日野市内を写したものである。冊子の文字数・サイズ、見やすさについては、掲載頂いている活動団体にアドバイスを頂き、反映した。

4.5 広報活動を行う

活動当初より目立った広報ができておらず、取材先の活動団体・組織を通じて口コミによるものが大きかった。しかし限界があり、日野市社会福祉協議会のボランティアインフォメーションへの掲載や日野市広報誌での活動紹介後、ポータルサイトへのアクセス数が増加した。2014年に行われた「2014 だいすき日野市民フェア」では、社会福祉協議会のはからいで紹介スペースを用意頂き、まち記者の活動を紹介するとともにポータルサイト「Hi Know!」を体験して頂いた。2015年は、ひの市民活動団体連絡会と共催した「まち活」で、冊子を持った方が活動を紹介して欲しいと訪れ、冊子を持っている・知っているという方が増えたことを実感した。先日行われた「まちづくり市民フェア2015」では、交流コーナーにポータルサイト「Hi Know!(ひのう)」を設置し、誰もが検索できる環境を設定した。その他、まち記者体験講座を催し、会場での取材を実施した。イベントの様子及びまち記者の記事は「Hi Know!(ひのう)」のまち記者取材記からご覧頂ける。

5. 現在の活動状況

2015年4月から「Hi Know!(ひのう)」事務局業務を、日野市社会福祉協議会(ボランティアセンター)に引継ぎ、新事務局の尽力により、活動が発展している。

2014年8月8日に公開してから2015年10月15日現在の登録数、アクセス数をまとめた(表4)。

表4 ポータルサイト登録、アクセス数

Table 4. Number of registration and accesses

コンテンツ	登録数	アクセス数
トップページ	-	46,075件
団体	147件	31,906件
イベント	498件	29,991件
イベント・活動報告	84件	9,080件
お知らせ	224件	-
まち記者取材記	467件	37,878件

掲載活動団体数も少しずつ増えており、現在147団体登録掲載している。(2015年10月15日現在)

6. 社会参加を促すしくみとしての検証

本しくみについて以下の検証を行った。サンプル数がとても少ないため、あくまでも可能性として記述する。

本稿では、(仮説2)まち記者の検証のみ詳細を報告する。

仮説1) 地域組織(地域包括支援センター)が、地域情報

を住民に伝達する役割を担うことで、高齢者の社会参加は促されるのか。

仮説 2) まち記者の活動を行う事で、高齢者自身の周辺環境、意識が変わり、人脈が増えとともに社会参加が促され、活動が活発になるのか

仮説 3) 既に活動している高齢者にとって活動をアピールする意味はあるのか。ポータルサイトや冊子による情報発信は有効か

(1) まち記者活動に関する検証

仮説 2) について以下の内容で実施した。

対象者：まち記者（40～70代，男性3名，女性1名）

活動期間：2014年4月～12月

条件：自身が興味を持ったイベント，活動取材する

比較内容：

- ・地域の認知度
- ・個人の活動エリアの広がり
- ・人脈（活動）の広がり
- ・行動に対する意識の変化について

検証方法：

- ・地域認知度について

日野市内を6地区に分け，まち記者になる前後の認知度を5段階で評価

- ・個人の活動エリアの広がりについて

日野市の地図上に，居住地，まち記者になる前の活動エリア，まち記者になった後の活動場所をマーキング（まち記者としての活動場所は，本人の自己申告の他，取材履歴からも補完した）

- ・人脈（行動）の広がりについて

取材先を起点に，知り合った人，知った活動，誘われた活動，参加した活動などを関連付けて表示

- ・こうどうに対する意識の変化について

個々のまち記者に対してヒアリングを実施

検証結果：

以下，まち記者へのヒアリング調査より得た内容である。

- ・まち記者になって，個人の意識から住民全体へ目を向けるようになった。住民と情報を共有するため，これまで個人では参加した事のない近所のイベントに参加し，記事を掲載した。
- ・常に提供できる情報を探し，これまで散歩した事のない場所へも足を伸ばして，偶然 地域の変化に気づいた。
- ・以前は，寝に帰るだけだった地域が，まち記者活動を通じて地域の地形や歴史を知り，知れば知るほど良いなどと思えるようになった（愛着）。

・世界が広がった。大学生のボランティアと話ができるようになった。

住民が“まち記者”という役割を担い，取材という目的をもって活動する事で，明らかに活動エリアや人脈の広がり，地域認知度が向上した。また，まち記者になる事で，個人視点から住民視点に意識が変わる事も確認できた。

実際，これまで足を運ぶ事の無かった場所へ出向き，知らなかった活動団体・人との出会いが，新たな活動へと繋がり，まち記者自身の活動が盛んになっている。



図 6 行動エリアの可視化

Figure 6. Visualization of action areas

まち記者の活動は，興味ある活動団体，イベントを取材することを基本としており，活動の結果をマーキングすると（図 6）これまで出向くことの無かった場所への活動が増えている事がわかる。興味ある情報を得る機会さえあれば，足を伸ばすきっかけになるという事が確認できた。

また，取材を通じて新たな人や活動と出会い，その活動団体が企画した数々のイベントへの参加，活動先での出会いを通じて他の活動へのお誘いを受けるなど地域との関わりが深まり，活動が広がっていることも確認できた（図 7）。

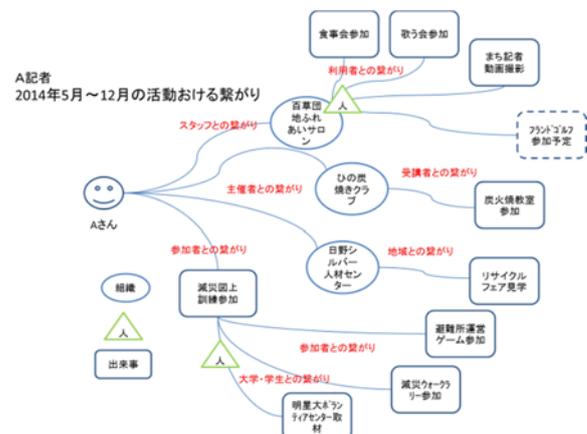


図 7 人脈可視化

Figure 7. Visualization of networks

・仮説1) 地域包括支援センターに対する検証結果

地域包括支援センターが、情報の伝達役となれる可能性は高い。地域包括支援センターの業務において、情報補完、コミュニティーツールとして活用した事例を確認した。ただ、ネット環境が整っていないため、情報の活用場所・方法について整備する必要がある。

・仮説3) 活動団体に対する検証結果

回答率79%のアンケート結果によると、ポータルサイトおよび冊子は、多くの掲載団体にとって他の団体活動を知り、関心を持つきっかけになったと回答しており、アピールできる場と認識されたようだ。掲載後、新メンバーの参加、問合せなどへの影響も少なからずあり、情報発信する意味を一部の団体には体験頂けた。しかし、まだアピールが消極的な団体も多く、情報更新の必要性を感じない団体の中には「更新する内容がない」「更新する価値がわからない」と回答しており、ポータルサイトの活用イメージを提示していく必要がある。

7. 社会参加を促すしくみとしての検証

(1) まち記者の担い手養成

現在、まち記者の登録者数は、約20名(2015年10月15日現在)。記事を活発に投稿しているのは約半数である。取材記事を探すことは、地域の変化に気づくことから、地域の防犯に通じる目を増やすためにも多くの方にまち記者になって頂くよう働きかけたい。ただ、「取材」から連想される敷居の高さが多くの方の障壁になっていると思われるため、今後は、新たなまち記者タイプを設定し、時間を拘束する取材は行わない、気軽に地域周辺の情報を写真と一言を添えて掲載してくれる役割の増員を考える必要がある。

(2) 取材記事の活用

まち記者が掲載した取材記事へのアクセス数などから住民のニーズを把握するなど、データの活用について考えていく必要がある。

(3) 情報を更新できない地域組織・団体の支援

情報更新経験がある活動団体はまだ少なく、忙しくて更新できない団体、ICT利用に不慣れな団体に対して活動情報を発信するための支援体制が必要と考える。また、更新の必要性を感じていない団体、使い方がわからない団体に対しての働きかけも必要である。

8. おわりに

まだまだ途上の活動であるが、地域情報を収集・発信するまち記者の地道な活動は、多くの方の共感と信頼を得る

ものとなっている。

例えば、イベントの掲載依頼、取材記事への外部リンク依頼、イベントへのお誘い、取材話題の提供など、まち記者やポータルサイトに向けて情報が集まりはじめたと実感する。

今後、まち記者の記事やポータルサイト「Hi Know! (ひのう)」, 冊子「Hi Know! (ひのう)」を通じて一人でも多くの高齢者がやりたい事を見つけ、実現できる環境になる事を願うばかりである。

謝辞 本活動は、市役所、教育委員会と事務局を担う社会福祉協議会の多大なる支援により、活動初期から住民を巻き込んだ活動を進める事ができました。

ご支援頂いた日野市、日野市社会福祉協議会、日野市教育委員会、地域の活動団体、NPO 法人ひの市民活動団体連絡会、伴に活動して下さいました実践女子大学原田謙研究室の皆様、まち記者動画作成に出演・協力頂きました百草団地ふれあいサロンの皆様、評価・検証にご協力頂きました地域活動団体、地域包括支援センター、シルバー人材センターの皆様、サイト構築・冊子作成に尽力頂きました株式会社 YCC、有限会社 A&D ネットワーク、富士通デザイン 永野行記さんに深くお礼申し上げます。

最後に苦労、喜びを伴に分かち合いながら本活動を支えて下さいました「まち記者」の皆様にご心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 渡辺美鈴, 渡辺丈真, 松浦尊磨, 河村圭子, 河野一: 自立生活の在宅高齢者の閉じこもりによる要介護の発生状況について, 日本老年医学会雑誌, 2005, 42 巻 1 号, pp.99-105
- 2) 藺牟田洋美, 安村誠司, 藤田雅美, 新井宏朋, 深尾彰: 地域高齢者における「閉じこもり」の有病率ならびに身体・心理・社会的特徴と移動能力の変化, 日本公衛誌, 1998, 第 45 巻, 第 9 号, 883-892
- 3) 新開省二: 高齢者の閉じこもり, 日医医誌, 2008; 45: 117-125/
- 4) 杉澤秀博, 高齢者における社会的統合と生命予後との関係, 日本公衛誌, 1994, 41, pp.131-139
- 5) 原田謙, 杉澤秀博, 浅川達人, 齊藤民: 大都市における後期高齢者の社会的ネットワークと精神的健康, 社会学評論 2004, 55(4), 434-448
- 6) 平成 16 年度, 内閣府調査, 市民活動が地域にもたらす効果に関する調査
- 7) 石垣一司, 熊野健志: 資格や役割をもった市民のエンゲージメントを実現する C+ システムの要件, 情報処理学会高齢社会デザイン研究会, 第二回高齢社会デザイン (ASD) 研究会発表
- 8) 原田博一, 八木龍平, 指田直毅, まちづくりイノベーション HUB「まちばた.net」, 雑誌 FUJITSU, 2013-3 月号, Vol.64, No.2, pp.178-184
- 9) 平成 25 年度, 内閣府調査, 高齢者の地域社会への参加に関する意識調査
- 10) Hi Know! (ひのう) ポータルサイト URL <https://www.hi-know.tokyo/>